

# 『アフロディテ讃歌』 256-7 行目について\*<sup>I</sup>

泰田伊知朗

## I

『アフロディテ讃歌』 256-7 行目は、アフロディテが恋人のアンキセスに対して自分たちの間に生まれてくる子供アイネイアスの将来について語っている場面である。ここで女神は、アイネイアスが将来ニンフたちに育てられることを述べる。

さて 256-7 行目には 2 通りの意味のとり方がある。まずテキストを見てほしい。

τὸν μὲν, ἐπὴν δὴ πρῶτον ἴδῃ φάος ἡελίοιο	256
Νύμφαι μιν θρέψουσιν ὄρεσκῶοι βαθύκολποι,	257

第 1 の方法では、256 行目の τὸν は 257 行目の μιν と同格だと考え、τὸν を ἐπὴν 節に含めない。この場合 ἐπὴν 節の動詞 ἴδῃ の主語は省略された「彼」すなわちアイネイアスで、目的語は中性単数対格の φάος ἡελίοιο である。直訳すると意味は、「彼を、彼が最初に日の光を見たとき、山に住む胸の大きなニンフたちが彼を育てるだろう」となる。このやり方の場合、256 行目の μὲν の後にカンマを打つと分かりやすい。当然、τὸν と μιν という 2 つの代名詞が連続することに不自然な感じはあるが、多くの校訂者はこちらを支持する。

第 2 の方法は、256 行目で μὲν の後にカンマを打たず、τὸν を ἐπὴν 節の中に含める。動詞 ἴδῃ の主語は中性単数主格の φάος ἡελίοιο、目的語は τὸν である。意味は、「彼を日の光が最初に見たとき、山に住む胸の大きなニンフたちが彼を育てるだろう」となる。こちらを支持する人はほとんどおらず、管見ではハイチュ\*<sup>2</sup> しか確認できなかった。

従来は、第 1 の方法の正当性がばかりが論じられてきたが、本稿では第 2 の方法を弁護してみたい。

\*<sup>1</sup> 本論文は、2010 年 10 月 16 日に京都大学で開催された第 9 回フィロロギカ研究集会で行った報告に加筆修正を施したものである。さまざまな方々から貴重なご意見を賜った。この場を借りて謝意を表したい。なお本稿は、義守大学研究補助金の交付を受けて行った研究の一成果である（義守大校内専題研究計画：關於日本的翻譯的歴史性研究 [ISU100-05-07]）。

\*<sup>2</sup> Heitsch 1965: 31.

## II

まず第Ⅰの方法を支持する根拠を考えてみたい。以下の3点が考えられる。

Ⅰ番目の理由は、第Ⅰの方法での「*φάος ἡελίοιο*を見る」という言い方は一般的だが、逆に第Ⅱの方法での「*φάος ἡελίοιο*が見る」という言い方は極めて稀なことである。例えば以下の例を見てほしい：*Il.* 18.61-2 ὄφρα δέ μοι ζώει καὶ ὄρα φάος ἡελίοιο | ἄχνηται 「彼は私のために生きて、日の光を見る間、悩むのです」、*Od.* 4.540 ἦθελ' ἔτι ζώειν καὶ ὄραν φάος ἡελίοιο 「彼はまだ生きて、日の光を見ることを欲した」。さらに「*φάος*を見る」という言い方は、叙事詩や悲劇などを通じて非常に一般的な文言であり、それらの中では必ず *φάος* は対格の目的語になる\*3。

Ⅱ番目の理由は、この讃歌の105行目と272行目で *φάος ἡελίοιο* が対格として使われていることである：*Il.* 105 *δηρὸν εὖ ζώειν καὶ ὄραν φάος ἡελίοιο* 「長くよく生きて、日の光を見ること」、*Il.* 272 *τῶν δέ θ' ὁμοῦ ψυχὴ λείπει φάος ἡελίοιο* 「彼女たちの魂も同時に日の光を後にします」。

Ⅲ番目の理由は、第Ⅰの方法を支持するというよりも、第Ⅱの方法を否定する理由である。すなわち、讃歌の詩人が手本としたであろうホメロスの両詩で *φάος ἡελίοιο* が主語となる場合は、必ず動詞は自動詞であり目的語を取らないことである。ホメロスで主語となる例は7例あるが、動詞は常に *πίπτω*, *δύω* など「沈む」を意味する。例えば以下の例を見てほしい：*Il.* 1.605 *κατέδν λαμπρὸν φάος ἡελίοιο* 「太陽の輝く光が沈んだ」、*Il.* 8.485 *ἐν δ' ἔπεσ' Ὠκεανῶ λαμπρὸν φάος ἡελίοιο* 「輝く光がオケアノスに沈んだ」\*4。もし本讃歌256-7行目で第Ⅱの方法が採られれば、*φάος ἡελίοιο* が主語であるのに動詞は他動詞の *ἴδῃ* となり、*τὸν* という直接目的語を取ってしまう。

以上のように、*φάος ἡελίοιο* を中心にして考えてみると、第Ⅰの方法のほうが正しいと言える。

## III

だが256行目の行頭の *τὸν μὲν ἐπήν* をもとにして考えると第Ⅱの方法が正しく思える。以下に3つの理由をあげる。

Ⅰ番目の理由は、行頭で *τόν* が *ἐπεὶ* の前に置かれるという例はホメロスに4例あるが、

\*3 E.g. *A. Pers.* 299 *αὐτὸς ζῆ τε καὶ βλέπει φάος* 「彼自身は生きていて、日の光を見ています」、*E. Alc.* 272 *τόδε φάος ὀρώϊτον* 「この世の光をあなたたちが見れますよう」、*Q. S.* 1.77 *ἰμείρων ἰδέειν ἱερὸν φάος* 「聖なる光を見ることを欲する」。

\*4 その他に以下の例を参照：*Il.* 23.154, *Od.* 13.33, 13.35, 16.220, 21.226。ヘシオドスにはない。

こうした例では全て、*τὸν* は *ἐπεὶ* 節の中に含まれ、目的語として機能することである<sup>55</sup>。まず以下の例を見てほしい：*Od.* 4.414 *τὸν μὲν ἐπὶν δὴ πρῶτα κατευνηθέντα ἴδησθε* 「あなた達が彼が横になっているのを最初に見たとき」。この例は本箇所と *τὸν μὲν ἐπὶν δὴ* が共通しており、さらに動詞も本箇所と同じく「見る」である。さらに次の例では、本箇所と同様に行頭の *τὸν* の直後に *ἐπεὶ* 節がきて、その後その *τὸν* が *μιν* で表されている：*Il.* 24.587–8, *Od.* 8.454–5 *τὸν δ' ἐπεὶ οὖν δμῶαί λούσαν καὶ χρίσαν ἐλαίῳ, | ἀμφὶ δέ μιν φᾶρος καλὸν ( / χλαῖναν καλὴν) βάλον ἠδὲ χιτῶνα* 「女中たちが彼を洗い、オリーブ油を塗った。そして彼に美しい上着と肌着をかけた」。このようにこれらの例と讃歌の 256–7 行目の間に語彙の上で共通点があることから、讃歌の詩人が 256 行目を作成する際にホメロスのこれらの例を参考にした可能性があると言える。そしてこれらのホメロスの例では *τὸν* は *ἐπεὶ* 節の中に含まれる目的語である。

2 番目の理由は、*τὸν* は『アフロディテ讃歌』の中で本箇所以外に 8 例あって、必ず行頭に置かれ、かつその行の中の目的語として働くことである。例えば以下の例を見てほしい：*56 τὸν δὴ ἔπειτα ἰδοῦσα φιλομμειδῆς Ἀφροδίτη* 「それから微笑み喜ぶアフロディテは彼を見た」、*76 τὸν δ' εὖρε σταθμοῖσι λελεμμένον οἶον ἀπ' ἄλλων* 「小屋の中で他のものと離れて 1 人で残っている彼を見つけた」、*107 τὸν δ' ἡμίβετ' ἔπειτα Διὸς θυγάτηρ Ἀφροδίτη* 「それからゼウスの娘アフロディテが彼に答えた」<sup>56</sup>。

3 番目の理由は、この讃歌の 274 行目と 278 行目では本箇所と同様に *τὸν μὲν ἐπὶν δὴ πρῶτον* が使われているが、274 行目では確かに、278 行目でも恐らく *τὸν* が *ἐπὶν* 節の中に含まれ目的語となることである：*274 τὸν μὲν ἐπὶν δὴ πρῶτον ἔλη πολυήρατος ἦβη* 「彼を最初にとっても愛らしい青春が捉えたとき」、*278–9 τὸν μὲν ἐπὶν δὴ πρῶτον ἴδης θάλος ὀφθαλμοῖσι, | γηθήσεις ὀρόων* 「彼を、すなわちわが子を最初にお前が両目で見たとき、お前は見て喜ぶだろう」。さらに類似した例が 225 行目にあり、そこでも *τὸν* が時を表す節の中に含まれ目的語となっている：*τὸν δ' ἦ τοι εἴως μὲν ἔχεν πολυήρατος ἦβη* 「彼をとっても愛らしい青春が包んでいる間は」。

ここで 278 行目に関して少し脱線する。278 行目に関しては、*τὸν* は *ἐπὶν* 節に含めず、*τὸν* を 279 行目の *ὀρόων* の目的語として考える研究者たちもいる<sup>57</sup>。だが *τὸν* は *ἐπὶν* 節に含めて、*τὸν* と *θάλος* を同格だと捉えたほうがよいだろう<sup>58</sup>。そう考える理由は 4 つある。

<sup>55</sup> 本文で紹介する 3 例以外のもう 1 つの例：*Il.* 22.376 *τὸν δ' ἐπεὶ ἐξενάρησε ποδάρκης δῖος Ἀχιλλεύς* 「足の速い高貴なアキレウスが彼の武器をはいだとき」。

<sup>56</sup> その他に、191、209、225、274、278 行目参照。

<sup>57</sup> E.g. Gemoll 1886: 61, Van der Ben 1986: 37, Faulkner 2008: 293.

<sup>58</sup> 同様の見解については、Heitsch 1965: 31 (n. 5) や Van Eck 1978: 95 参照。

理由 1 は、先にも見たように<sup>\*9</sup>、本讃歌の τὸν は全てそれが含まれる行の中で目的語として働くことである。理由 2 は、τὸν を ὀρόων の目的語だとすれば 278 行目の μὲν の後でカンマを打つことになるが、その場合 τὸν μὲν のあとで不自然に行が切れ、さらに ἐπήν 節が不自然な挿入節となることである。これについては後述する<sup>\*10</sup>。理由 3 は、分詞 ὀρόων は目的語が省略されるケースが多いことである<sup>\*11</sup>。理由 4 は、θάλος が同格として働く例が『デメテル讃歌』66 行目で見られることである：κούρην τὴν ἔτεκον, γλυκερὸν θάλος, εἶδει κυδρήν 「私が産んだ少女を、愛らしい子供を、姿において誉れ高い彼女を」。以上 4 つの理由から 278 行目に関しては、τὸν を ὀρόων の目的語として考えるべきではないと考える。

さて本題に戻ろう。以上のことから、τὸν μὲν ἐπήν をもとにすれば第 2 の方法が正しいと思える。

#### IV

以上見てきたように、256 行目の行末の φάος ἡελίοιο をもとにすれば第 1 の方法が、逆に行頭の τὸν μὲν ἐπήν をもとにすれば第 2 の方法が正しいと考えられ、第 2 の方法も決して無視することはできない。

そして筆者はあえて第 2 の方法を支持したいと考える。その理由は、第 1 の方法を採用した場合のギリシア語の文章は不自然だからである。そう考える理由を 4 つあげる。

1 番目の理由は、最初に言ったように代名詞の連続である。もう 1 度 μὲν の後にカンマを打った場合のテキストを見てほしい：

τὸν μὲν, ἐπήν δὲ πρῶτον ἴδῃ φάος ἡελίοιο,	256
Νύμφαι μιν θρέψουσιν ὀρεσκῶι βαθύκολποι,	257

このテキストでは、1 つの文の中で τὸν と同じ人物を指す μιν が同時に用いられており不自然である。

2 番目の理由は、この不自然な代名詞の連続に対する校訂者たちの弁護に説得力がないからである。まず訳に関しては、例えばウエスト<sup>\*12</sup> は 256-7 行目を次のように訳している：“As for him, once he sees the sunlight, he will be nursed by the deep-bosomed, mountain-couching nymphs”。256 行目の τὸν を “as for him …” と限定の対格のように訳しているが、

<sup>\*9</sup> 第 3 章の 2 番目の理由を参照。

<sup>\*10</sup> 第 4 章の 3 番目と 4 番目の理由を参照。

<sup>\*11</sup> E.g. *Il.* 3.324-5 Ἐκτωρ | ἄψ ὀρόων 「ヘクトルが後ろを向いて」、*Il.* 20.23 ἐνθ' ὀρόων φρένα τέρψομαι 「私はそこで眺めて、心において喜ぶでしょう」、*Od.* 8.314 ἐγὼ δ' ὀρόων ἀκάχημαι 「私は見て苦しんでいます」。

<sup>\*12</sup> West 2003: 179.

これは便宜上である。限定の対格は『アフロディテ讃歌』では体に関する単語にしか使われない\*13。

また校訂者たちはこの奇妙な  $\mu\nu$  に関して他にも例があるとして、*Od.* 16.78–80 をあげる\*14：

ἀλλ' ἦ τοι τὸν ξείνον, ἐπεὶ τεὸν ἴκετο δῶμα,	78
ἔσσω $\mu\nu$ χλαῖνάν τε χιτῶνά τε εἴματα καλά,	79
δώσω δὲ ξίφος ἄμφηκες καὶ ποσσὶ πέδιλα,	80

「このお客があなたの家に来たので、彼に上着と下着と美しい服を着せてあげ、両刃の剣を与え、足にはサンダルをあげよう」。

だがこの例では第 I の方法を弁護できない。なぜならまず、完全に同じ例ではないからである。*Od.* 16.78–80 では定冠詞＋名詞 (τὸν ξείνον) を代名詞  $\mu\nu$  で受けている。他方、本讃歌の 256–7 行目は代名詞 τὸν をさらに代名詞  $\mu\nu$  で受けており、*Od.* とは異なる。さらに *Od.* 16.78–80 はテキストが完全に確定しているわけではない。79 行目の  $\mu\nu$  を μὲν とする異読が伝わっており、例えばベッカーはそれを支持している\*15。

3 番目の理由は、第 I の方法では、256 行目の ἐπὴν 節が I 行の大半を占める長い挿入節になることである。『アフロディテ讃歌』では、このような長い挿入節はない。もちろん挿入節は見られるが、短い、一般的なものだけである。以下の 3 つの例を見てほしい：

例 1	Ὅτρεις δ' ἐστὶ πατὴρ ὀνομακλυτός, εἴ που ἀκούεις,	I 11
	ὄς πάσης Φρυγίης εὐτειχῆτοιο ἀνάσσει.	I 12

「その名において知られたオトレウスが父です。お聞きなっているかもしれませんが、父は、堅固な城壁を張り巡らした全フリュギアを支配しております」。

εἴ που ἀκούεις は *Od.* 15.403 でも使われている。

例 2	βουλοίμην κεν ἔπειτα, γύναι ἐκυῖα θεῆσι,	I 53
	σῆς εὐνῆς ἐπιβάς δύναι δόμον Ἴδιος εἶσω.	I 54

「そうしたら、私は望みさえするだろう。女神たちに似ている女性よ。あなたのい

\*13 本讃歌の中の限定の対格の例：41 ἢ μέγα εἶδος ἀρίστη 「彼女は大きな姿において最高である」、55 δέμας ἀθανάτοισιν εὐκίως 「姿において不死なる者たちに似ている」、82 παρθένω ἀδμήτη μέγεθος καὶ εἶδος ὁμοίη 「大きさと姿において未婚の処女に似ていた」。その他に、201、216、241 行目参照。

\*14 E.g. Càssola 1975: 558, Faulkner 2008: 284.

\*15 Bekker 1843: 240. スタンフォードは、*Od.* 16.79 では  $\mu\nu$  のほうがオリジナルだろうとしながらも、 $\mu\nu$  より μὲν のほうが文脈をよくすることを認めている (Stanford 1959: 266)。

る床に入った後で、ハデスの家に行くことを」。

呼格の挿入は一般的である\*16。

例 3 *καί τε Διὸς κατὰ δῶμα θεοῖς ἐπιουνοχοεῖοι,* 204  
*θαῦμα ἰδεῖν, πάντεσσι τετιμένος ἀθανάτοισι,* 205  
*χρυσέου ἐκ κρητῆρος ἀφύσσων νέκταρ ἐρυθρόν.* 206

「ゼウスの館で、神々に酒を注ぐために、見るも驚きであった。全ての不死なる者たちに敬われ、黄金の混酒器から赤いネクタルを注ぐ彼は」。

*θαῦμα ἰδεῖν* は H. Sc. 318 でも使われている。また同様の意味で *θαῦμα ἰδέσθαι* がホメロスとヘシオドスで 12 回\*17、本讃歌でも 1 回\*18 と、叙事詩でよく見られる。

以上の例からわかるように、『アフロディテ讃歌』では長い挿入節の例は見られない\*19。従って 256 行目でも、先ほどの 278 行目でも *ἐπὶν* 節を挿入節だと考えるべきではないだろう。

4 番目の理由は、第 I の方法のように 256 行目の *μὲν* の後にカンマを打てば、韻律上第 I 脚の長短の後に句読点が置かれることになるが、これが不自然なことである。まず行のこの箇所に句読点が置かれることはそれほど一般的なことではない。本讃歌のフォクナーの最新のテキストでは、256 行目を除けば 79 行目と 180 行目だけである。さらにここに句読点が置かれる場合、ホメロスでも例外的に認められるケースがあり、それは以下の 3 パターンに分類される\*20：(1) 前の行からの続き（エンジャンプメント）、(2) 呼格や命令法の前後、(3) 発言の直後の *ὦς φάθ'* もしくは *ἦ ῥα* の後。ちなみに本讃歌の 79 行目は (1) に、180 行目は (3) に当たり、これら 2 つの例は稀な例とはいえない。他方、256 行目の *μὲν* の後にカンマが置かれればどれにも当てはまらず、極めて稀な例外となる\*21。

\*16 本讃歌の 185 行目でも呼格の挿入が見られる：*θεά* 「女神よ」。

\*17 E.g. *Il.* 5.725, *Od.* 6.306, *H. Th.* 575.

\*18 本讃歌 90 行目。

\*19 本讃歌のその他の挿入節の例：38 *εὔτ' ἐθέλοι* 「彼女が欲したときに」（同様の例は *H. Th.* 28）、146 *ὡς ἀγορεύεις* 「あなたがおっしゃるように」（同様の例は *Il.* 17.180, *Od.* 15.155 など）。唯一長めの挿入節が 276 行目に見られるが（*ὄφρα* 節）、この行はテキスト上の問題が指摘され、削除されることもある：276-7 *σοὶ δ' ἐγώ, ὄφρα κε ταῦτα μετὰ φρεσὶ πάντα διέλθω, | ἐς πέμπτον ἔτος αὐτίς ἐλεύσομαι υἱὸν ἄγουσα* 「そして私はあなたのもとへ、心にあるこれらのことを全て詳しく語るために、5 年目に息子を連れて再びやって来るでしょう」。テキスト上の問題点については West 2003: 181 や Faulkner 2008: 291-2 参照。

\*20 この 3 パターンに当てはまらない例はほとんどない。Allen の OCT 版の『イリアス』では、わずか 2 例しかそうした例外はない（*Il.* 9.48, 22.450）。

\*21 この 4 番目の理由から言っても、278 行目でも *μὲν* の後にカンマを打って *ἐπὶν* 節を挿入節とする考え方

以上の理由から筆者は第Ⅰの方法のテキストが不自然だと考える。

## V

続いて、第2章で見た第Ⅰの方法を支持する3つの理由について反論する。

まずⅠ番目の理由「『*φάος ἡελίοιο* を見る』は一般的で、『*φάος ἡελίοιο* が見る』は稀」に対して、3点反論する。

反論Ⅰは、「*φάος* が見る」という例も一応あることである：A.R. 4.1019 ἴστω ἱερόν *φάος Ἡελίοιο* 「太陽の聖なる光よ、ご照覧ください（知っておいてください）」。また「（太陽神である）ヘリオスが見る」という例が見られる：Od. 8.271 Ἡλιος, ὁ σφ' ἐνόησε μιγαζομένους *φιλότητι* 「ヘリオスが。彼は彼らが愛に交わるのを見たので」、Od. 8.302 Ἡέλιος γάρ οἱ σκοπιήν ἔχεν εἰπέ τε μῦθον 「なぜならヘリオスが彼のために見張りをして、話をしたから」、Od. 11.15–6 οὐδέ ποτ' αὐτοὺς | Ἡέλιος φαέθων καταδέρκεται ἀκτίνεσσιν 「輝くヘリオスが光と共に彼らを見下ろすこともない」、Od. 11.109 Ἡελίου, ὃς πάντ' ἐφορᾷ καὶ πάντ' ἐπακούει 「ヘリオスの。彼は全てを見て、全てを聞く」。

反論Ⅱは、確かに *φάος ἡελίοιο* と「見る」という動詞の組み合わせでは、*φάος ἡελίοιο* は通常対格だが、一般的に対格で使われているからと言って、本讃歌でも対格であるとは限らないということである。なぜなら、他の叙事詩で対格で使われている決まり文句が、本讃歌で主格で使われている例があるからである。本讃歌の207行目では *Τρῶα δὲ πένθος ἄλαστον ἔχε φρένας* 「忘れることのできない悲嘆が心においてトロスをとらえた」とある。この場合、中性単数の *πένθος* が *ἔχε* の主語で、*πένθος* は主格である。しかしこの組み合わせでは、ホメロスでは *πένθος* は全て *ἔχω* の目的語で、対格である：Od. 7.218, 10.376, 24.233 *πένθος ἔχοντα* 「悲しみを抱く」、Od. 7.219 ἐγὼ πένθος μὲν ἔχω φρεσίν 「私は心で悲しみを抱く」、Od. 18.324 ἔχε πένθος ἐνὶ φρεσὶ Πηνελοπείης 「心の中でペネロペイアについて悲しみを抱く」。これらのことから、ホメロスで対格で使われていた決まり文句を讃歌の詩人が例外的に主格で使うこともあったことがわかる<sup>\*22</sup>。従って *φάος ἡελίοιο* と「見る」の組み合わせで *φάος ἡελίοιο* は一般的には対格だが、例外的に本讃歌の詩人がそれを主格として使った可能性も否定できない。

反論Ⅲは、本箇所 *φάος ἡελίοιο* と「見る」の組み合わせは特別な意味を持つので、一般的な慣例は当てはまらないということである。本箇所ではこの組み合わせは「誕生」の

には賛同できない。

<sup>\*22</sup> なお本讃歌207行目のように *πένθος* が *ἔχω* の主語になる例は H. Th. 467 *Ῥέην δ' ἔχε πένθος ἄλαστον* 「果てしない悲嘆がレアをとらえた」で確認される。讃歌の詩人は207行目を作る際に、ヘシオドスのこの箇所を参考にしたのかもしれない。

意味の文脈の中で用いられる。他方、ホメロスでは「*φάος ἡελίου* を見る」という言い方が9例あるが、その全てで「生きながらえる」という意味である。例えば以下の例を見て欲しい：*Il.* 5.120 *δηρὸν ἔτ' ὄψεσθαι λαμπρὸν φάος ἡελίου* 「まだ長く輝く日の光を見ること」、*Od.* 4.833 *ἢ που ἔτι ζῶει καὶ ὄρῃ φάος ἡελίου* 「あるいはどこかでまだ生きていて、日の光を見ているか」<sup>\*23</sup>。本讃歌の詩人は「誕生」という新しい意味を *φάος ἡελίου* と「見る」の組み合わせに当てはめることにあわせて、対格で使われていた *φάος ἡελίου* を主格に変更した可能性もある<sup>\*24</sup>。

続いて第2章であげられた2番目の理由「本讃歌の中に他にも対格の *φάος ἡελίου* がある」に対する反論である。本讃歌の別の箇所に対格で使われているから、256行目でも対格だとは限らない。なぜなら、本讃歌で対格で使われている中性の名詞が、本讃歌の別の場所では主格で使われていることもあるからである。例えば名詞 *ἄλσεά* 「森」は、20行目では主格で使われている：*(τῆ ἄδε τόξα...)* *ἄλσεά τε σκιόεντα* 「彼女を弓や……陰のある森が満足させる」。しかし97行目では対格である：*αἶτ' ἄλσεα καλὰ νέμονται* 「美しい森に住む」。同様に主格と対格の混用が中性の名詞 *ἔργα*、*κάλλος*、*γῆρας* で見られる<sup>\*25</sup>。これらの例から、*φάος ἡελίου* は本讃歌の他の箇所で対格として使われているが、256行目では詩人がそれを主格として使った可能性も否定できないと言える。

続いて3番目の理由「*φάος ἡελίου* が主語となる場合は、必ず動詞は自動詞であり直接目的語を取らない」に対する反論である。確かに第2の方法では *φάος ἡελίου* が主語となるのに、動詞は他動詞 *ἴδω* で、*τὸν* という直接目的語を取ってしまう。しかし本讃歌ではイレギュラーに目的語を取る例が他にもある。261行目の *ἐρρώσαντο* は同族対格 *χορὸν* を取る：*καί τε μετ' ἀθανάτοισι καλὸν χορὸν ἐρρώσαντο* 「不死なる者たちとともに美しい踊りを踊る」。動詞 *ῥόομαι* が同族対格を取る例は他の作品では見あたらない。この例から、例外的に本讃歌の中でだけ主格の *φάος ἡελίου* が他動詞と直接目的語を取ったとしても、それほど不自然ではないと言える。

以上の理由から、第2章で見た第1の方法を支持する根拠は決して確固たるものではないと言えよう。

<sup>\*23</sup> その他に以下の例を参照：*Il.* 18.61, 18.442, 24.558, *Od.* 4.540, 10.498, 14.44, 20.207.

<sup>\*24</sup> なお『アポロン讃歌』では「誕生」の意味で対格の *φάος ἡελίου* が使われている例がある：*h.Ap.* 71-2 *μή, ὅπότε ἂν τὸ πρῶτον ἴδῃ φάος ἡελίου, | νῆσον ἀτιμήςσας* 「彼が最初に日の光を見たとき、島を侮蔑しないかと」。

<sup>\*25</sup> *ἔργα* : 主格 6, 9, 21, 対格 1, 11, 15, 122, *κάλλος* : 主格 174, 対格 77, 203, *γῆρας* : 主格 244 対格 224。



## VI

以上見てきたように、筆者は『アフロディテ讃歌』の詩人が τὸν を ἐπὶν 節の中に入れて考えていたのではないかと、すなわち第 2 の方法が支持されるべきではないかと考える。

## 参考文献表

- Bekker, I. 1843. *Homeri Odyssea* (Berlin).
- Cassola, F. 1975. *Inni omerici* (Milan).
- Faulkner, A. 2008. *The Homeric Hymn to Aphrodite: Introduction, Text, and Commentary* (Oxford).
- Gemoll, A. 1886. *Die homerischen Hymnen* (Leipzig).
- Heitsch, E. 1965. *Aphroditehymnos, Aeneas und Homer* (Göttingen).
- Stanford, W. B. 1959. *Homer: Odyssey XIII–XXIV*. 2nd. ed. (London).
- Van der Ben, N. 1986. *Hymn to Aphrodite 36–291: Notes on the Pars Epica of the Homeric Hymn to Aphrodite*, *Mnemosyne* 39, Fasc. 1/2: 1–41.
- Van Eck, J. 1978. *The Homeric Hymn to Aphrodite. Introduction, Commentary and Appendices* (Utrecht).
- West, M. L. 2003. *Homeric Hymns, Homeric Apocrypha, Lives of Homer* (Cambridge, Massachusetts/London).

(台湾 義守大學)